

令和3年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢北陵高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
1 「時を守り、場を清め、礼を正す」をスローガンに掲げ、生徒が自ら実践できるように粘り強く働きかける。	① 時間厳守の指導を徹底し、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	生徒指導 学年 各教科	学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	皆出席者数 1年 52人 2年 52人 3年 37人 平均 47人 C	中間評価時と比べて半減している。冬場を迎えて体調不良を訴える生徒が激増したことが要因と思われる。健康管理(感染症対策含)の指導が必要であり、今後とも生徒の状況把握に努め、保護者と連携しながら、遅刻・欠席者数を減らす取組を継続する。
			自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	A+Bの計 生徒 81% 保護者 88% 教員 47%	AとBの合計が、中間評価時と比べると生徒(-3ポイント)、保護者(+2ポイント)、教職員(-12ポイント)で、いずれも90%未満であった。生徒・保護者が考える挨拶と教職員が実践してほしい挨拶の姿に齟齬が生じている。教職員から生徒に積極的に挨拶する姿を見せることで、生徒自身の挨拶に変化が現れるとともにコミュニケーションの1つという認識を持たせたい。
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	生徒指導 学年	北陵生は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	A+Bの計 生徒 90% 保護者 91% 教員 30%	AとBの合計が、中間評価時と比べると生徒(-4ポイント)、教職員(-9ポイント)であった。生徒・保護者は90%以上であるが、教職員は、Cが51%を占めている。求める生徒像を学校全体で共通理解し、教職員が一丸となって毅然とした態度で、生徒の規律・マナーの向上に努める。
			③ 生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にし、生徒理解を深める。	生徒指導 保健相談 学年	生徒理解に心がけ、不注意な行動の未然防止に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない
	生徒のいじめ等の早期発見や早期対応に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの計 教員 91%			AとBの合計が、91%と目標を超えたが、いじめアンケートや担任、保健相談課に頼るばかりではなく、教職員全体のちょっとした変化を見逃さない目配り、心配りが必要である。保護者との連絡をより密にし、教職員間の連携を図りながら生徒理解を深める。
	学校関係者評価委員会の評価	挨拶については、誰に対しての挨拶なのかによって態度が変わってくる。教職員から挨拶を行うことが必要であることを共有し、教職員に積極的に関わってほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	学校内においては外部からの来客者に対して自ら挨拶できる生徒が多くいるが、登下校、S T、授業、部活動など、学校内でのあらゆる場面を使って、教職員から挨拶を行い、人間関係を築くためのコミュニケーションの1つとしての認識を持たせる。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
2 朝学習の充実と授業改善を進め、基礎学力の定着とわかる喜びや学ぶ意義を実感できるように努める。	① 研究授業や公開授業を積極的にを行い、授業改善に努める。	教務 各教科	授業で生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	A+Bの計 教員 79%	AとBの合計が、中間評価時と比べると+8ポイントであった。目標としている判定基準90%を下回っている。ペア活動やグループ活動が制限される中ではあるが、新学習指導要領で求められる学力観を理解し、「指導と評価の一体化」につながる授業実践を一丸となって進める。
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	教務 各教科	I C T機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	B 73%	肯定的評価の内訳はA（十分思う）30%、B（だいたい思う）43%で、中間評価時と比べるとAが6ポイント増加している。GIGAスクール構想における一人一台端末の取組による意識改革が授業実践に繋がった結果である。今後ともI C T機器の効果的な活用に取組、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	教務 進路指導 学年 各教科	家庭での平均学習時間が A 90分以上である（64.0%） B 70分以上～90分未満である（9.0%） C 55分以上～70分未満である（11.2%） D 55分未満である（15.8%）	定期試験前の学習時間が70分以上である生徒 B 73%	AとBの合計が73%で、中間評価時と比べると-3ポイント、昨年度同時期と比べると+1.3ポイントで大きな変化はなかった。定期試験前の学習を求めるだけでなく、日頃の家庭学習に繋げる取組が必要であり、家庭での予習や復習に繋がる授業改善やゲーグルクラスルームを使った授業実践に取り組む。
学校関係者評価委員会の評価	I C T機器を使うことを目的とせず、今社会で求められている力が何であるのかを教職員で把握し、それらを育むためにどのような授業が必要であるかを考えた上で、効果的にI C T機器を活用し、生徒育成に努めてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	新学習指導要領で求められる学力観はもとより、今社会で求められている力を職員研修や互見授業を行いながら教職員で共有し、「これまで」ではなく「これから」に繋がる授業実践に取り組む。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
3 自分を知り、社会を知り、将来の自分を考えることのできる生徒の育成に向け、キャリア教育の一層の推進を図る。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	進路指導 教務 学年	担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満 進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な探究の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった 四年制大学志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 学校推薦による就職希望者について、 A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない	面談を実施した回数(1月末現在) C A+Bの計 進路を考える上で役に立ったと答えた生徒 85% 四大志望者のうち第1志望校 A 93% 学校推薦による就職希望者 B	回数はコロナの感染状況に伴いCとなった。1年次生の系列選択、3年次生の進路選択においては、保護者の思いも受け止めながら、生徒本人にとって最善の道を、面談を通して支援していく必要がある。また、学校生活の中で生まれる様々な悩みを把握する場としても重要であり、担任と他の校務分掌と連携した、より効果的な面談を適切な時期に今後とも行う。 曖昧な気持ちで決めた進路目標が自ら調べていくうちに定まり、意欲的になったと振り返る生徒が多かった。ただ、C、Dと回答した生徒がどのような情報を求めているのか、足りない情報は何かを分析し、これまでの指導をベースに改善を加え、将来の自分を考えることのできる生徒の育成に向け、キャリア教育の一層の推進を図る。 就職希望者も進学希望者も大いに健闘し、教職員の生徒一人ひとりを大切にしたい手厚い指導も功を奏したといえる。今後は、さらに生徒の希望をじっくり聞き、性格や適性も見極めつつ的確な助言を与えるとともに、できるだけ早期に生徒の希望が達成されるよう努める。3年次生での進路志望の変更が極力少なくなるよう個別面談を充実させる。
	② 各種資格・検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。	各教科 学年 進路指導	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 900人以上であった B 850人以上～900人未満であった C 800人以上～850人未満であった D 800人未満であった	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数 (1月末現在) 729人 D	コロナ禍において、検定実施日の変更や実施が中止になったことにより、受けられなかった検定(漢字検定等)があったこともあり、のべ人数は減少した。しかし、全商商業検定3種目以上1級合格者数では計19人と躍進した。今後とも各種資格・検定試験に取り組む機会を捉え、挑戦する意欲を喚起する。
	③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	進路指導 学年	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	A+Bの計 保護者 91%	保護者に対する進路ガイダンスを今年度開催することができなかったが、担任が進路に合わせた情報の提供を行った。次年度は進路ガイダンスの実施とその充実、さらにその時々に必要な情報を提供する。
学校関係者評価委員会の評価	高校入学後に総合学科のカリキュラムを通して「自分探し」が出来る学校なので、進路選択するとき目的もなく決めさせるのではなく、具体的な進路目標を定めるように指導してほしい。また、同じ進学でも大学、短大、専門学校等は異なるので、適性にあった進路選択に繋がるようお願いしたい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	どちらかと言えば、進学希望者に将来のビジョンが見えず安易な進路選択が見られるので、具体的な進路目標を定められるよう「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」での取組を進路選択により繋がるように改善することに加えて、生徒一人ひとりの進路に応じた面談や進路ガイダンスに取り組み、キャリア教育の充実を図る。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
4 学校の活性化を図るために、部活動の活性化を目指すとともに、学校の魅力を発信する取組を充実させる。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	特活 全職員	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	D 1年 73.2% 2年 70.4% 3年 66.5% 全体 70%	中間評価時より5ポイント低下し、最終加入率は70%（547人中383人加入）となった。1年生の退部者が2学期末に増加し、13ポイント減少した。新型コロナ禍での活動制限、部活動内の人間関係、本人の活動意欲の低下や目的意識の薄弱が原因と考えられる。今後活性化させるために、部活動の魅力のアピールや他部との連帯感を持たせる。
			部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	B 70%	令和3年度前半は、県総体・総文等が実施され、練習成果を発揮できたため比較的高い数字(72%)であったが、2学期はコロナ禍により部活動禁止となったことが影響している。部活動の成果をPR・発信する場の設定や、自分自身の成長に繋がっていることを感じさせる取り組みを行う。
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	特活	休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 400人以上であった B 300人以上～400人未満であった C 200人以上～300人未満であった D 200人未満であった	A 100%	夏休み前までは、東原町のボランティアにのべ28名が参加したが、コロナ禍拡大で、サマーボランティアは2名参加にとどまった。秋の「北陵アバンテ」で、全校生徒540名余が森本地区中心にゴミ収集や通学路清掃、草刈りを行い、地域の方々から謝辞が寄せられた。次年度も時期を考えて「アバンテ」を実施する。
③ 信頼される学校づくりに努める。	総務 学年 生徒指導 保健相談	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	満足していると答えた保護者 D 77%	本校教育活動の理解度を上げるには、学校行事などの機会を増やすという意識ではなく、保護者が求めていることにどれだけ敏感に反応し応えるかである。「北陵だより」の充実が本校の教育活動の結果を伝えているが、より一層の理解を得るため、①保護者向け北陵だよりの発行、②HP記事の更新を各課学年が定期的に更新、③学年通信のメール配信版 等の実施について検討する。	
		発信しているとする教員の割合が A 95%以上 B 85%以上95%未満 C 75%以上85%未満 D 75%未満	情報を発信していると答えた教員 B 91%	9割の教員が情報を発信しているということであり、本校の活動が校外に対しておおむね周知できている。また、ウェブページは学校のことを知るための有益なツールであるため、今後とも全教員で記事更新に努める。	
学校関係者評価委員会の評価	保護者というよりも、まず生徒が満足度・達成感を感じられるような教育活動をお願いしたい。森本駅前広場での「北陵イベント」はとても良い取組であった。学校の情報発信ができる場でもあり、今後とも続けてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	生徒が満足感や達成感を持てるような教育活動の充実を図る。地域ボランティアの活性化を図るとともに本校の情報発信に繋がる取組を行う。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
5 働き方改革における教員の意識改革と行動改革を進めるとともに、業務の平準化に取り組む。	① 月間や週間目標を設定し、それぞれが計画的に業務を進める。	全職員	時間外平均が、前年度同期より、 A 前年度より減少している B 前年度と同等または増加している	B R3年度 4～1月平均 35.0時間 R2年度 4～1月平均 31.3時間	昨年度4月5月が新型コロナウイルス感染症対策のため休校となっていたため、今年度と単純に平均数値だけで比較できないが、6月以降の超過勤務が月80時間を超える教職員の数は昨年度のべ16人、今年度24人であった。会議を減らしたり、定時退校日を設け時間外勤務の縮減について取り組んでいるが、勤務時間を意識した効率的な業務遂行と仕事のスクラップ&ビルドを含めた業務改善を計画的に進める。
学校関係者評価委員会の評価	数字だけで判断するのではなく、教職員の仕事に対する充実度からも働き方改革をすすめてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	特定の教職員の勤務時間が長くなることがみられるので、充実感も考え合わせながら、時間外勤務時間の平均値だけでは見えない勤務状況の把握に努め、学校行事の精選や業務にICTを効率よく活用するなど業務のスクラップ&ビルドと平準化を進める。				